

藤沢周平

早春

その他



早春 その他

平成十年一月二十日 第一刷

著者 藤沢周平

発行者 和田宏

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話(〇三)三二六五―一二一一

本文印刷 理想社

付物印刷 凸版印刷

製本所 中島製本

定価はカバーに表示しております。
万一落丁乱丁の場合はお取替え致します。
小社営業部宛お送り下さい。

© Kazuko Kosuge 1998 Printed in Japan

ISBN4-16-317430-3

目次

深い霧

七

野菊^も守り

五

早春

一五

随想など

小説の中の事実

一五

遠くて近い人

一七

ただ一度のアーサー・ケネディ

一八

碑が建つ話

一九

初出覚え

装画 福井 爽人
題字 谷澤美智子

早
春
そ
の
他

深
い
霧

一

原口慎蔵には、長く忘れていたあとで、ふと思い出すといった性質の、格別の記憶がひとつある。

それはある情景で、情景としてはごく単純なものだった。裏木戸の内側で、慎蔵の母が若い男を抱きしめている、といってもその若い武士は母よりも背が高く、骨格もたくましくて、母の腕は男の肩にもとどいていないのだが、男はされるがままにじっとしていた。二人を包み込むように屋敷の中を夕霧が静かに流れ動いていたのも思い出す。

子供ながら、見るべきではない情景を見てしまったようなおそれから、慎蔵は胸をとどろかし、足音を忍ばせてその場所から引き返した。だが、そのときの慎蔵はごく小さ

かった。多分二つか三つごろのことだったろうと、慎蔵は思っていた。

その日、稽古が終ったあとで、風邪で寝こんでいる道場主の桂木重左衛門を見舞って、母屋から道場にもどってきたとき、原口慎蔵はひさしぶりにその古い記憶を思い返すことになった。わたり廊下を歩いてくると、道場の中で男が二人話していた。ほかに人もいないらしく声高な話し声だったので、声は筒抜けに慎蔵の耳に入ってくる。

「三人目の討手とうわさがあったあの人だな」

「そう、あの人だ」

「ふうん、国勤めに替って御奏者になれるのか」

そう言っているのは国井庄八という御小納戸勤めの男である。国井はつづけた。

「器量人だそうだから、一段昇進して帰国するということだろうが、塚本の縁者の方は心配いらんのかな」

慎蔵は足をとめた。絶家になった塚本家の親戚はほかにもあるが、慎蔵も縁者の一人だった。それはもう心配いるまいて、と相手が言った。声は勘定組にいる林伝五郎という男だった。二人とも慎蔵の道場の先輩である。

「古い話だ。あれからもう二十年ぐらいはたっただろう」

十八、九年前のことだ、と慎蔵は思った。

秋の夕刻、屋敷の中を流れる霧の中で母に肩を抱かれていたのは叔父の塚本権之丞。母の弟で、塚本家の当主だった権之丞は、その夜、藩領を出奔して討手をかけられ、遠い信州路で討たれた。藩内の抗争に巻きこまれて人を斬り、そのことが露見して領外に逃げたのだというが、慎蔵はその詳細を誰にも聞いたことがない。

いずれにしろ、慎蔵はその叔父をただ一度、いまにして思えばひそかに母に別れを告げにきたそのときの叔父を見たきりである。ほかに叔父に会った記憶はなかった。だがいま、林伝五郎と国井庄八が話していることは、雷鳴のように慎蔵の脳裏に鳴りひびく。塚本権之丞は他国で討たれ、塚本家は絶家となった。そしてその直後に、塚本の縁につながる家家はそれぞれ、あるいは役替えとなりあるいは禄を減らされた。慎蔵の家も家禄を七石減らされ、そして慎蔵が十のときに母の衣与が病死した。

母はもともと病弱なたちで、顔色が青白く口数少なに暮らしている人だった。しかし母は実家の塚本家では権之丞とただ二人だけの姉弟だったので、弟の権之丞が異常な死を遂げたあとは、その始末をすべて引きうけなければならなかった。以後の積もる心労

が母の早い死を招いたとも考えられる。病死したとき衣与は二十八だった。

慎蔵からみればそれほど大きな事件なのに、いまだに正確には何年前のことかもわからず、またその仔細を語る者はいなかった。他人はむろんのこと、慎蔵の肉親も母の縁者も、事件の中身についてはひとこともしゃべらず、慎蔵もまたあえてたずねなかったのだ。成長するにつれて叔父の事件は藩の秘事であるだけでなく、塚本家の秘事でもあるらしいと推測がつき、原口家の総領としてはみだりに触れるべきものでないことも気づいたのである。

だが道場に残っている二人は、無造作に古い叔父の事件のことを口にしていた。事件のことを、人人は長い間さわらぬ神に祟^たりなしといったふうにな、語ることを避けてきた。そのためにほとんど忘れられかけていた事件が、いまになりなまなましく眼前におどりと出てきた感触が、慎蔵を動揺させている。慎蔵はとどろく胸を静めてから空咳^{からせき}をひとつし、わざと廊下に足音を立てて道場に入った。

突然に現われた慎蔵を見て、二人はあきらかに間のわるい顔をした。ことに国井は狼狽をかくせないという感じで、林と慎蔵の顔を交互に見ると、突然に、では寄るところがあるのでお先すると言ひ、すたすたと道場を出て行った。そのうしろ姿に、慎蔵は今

日はごくろうさまでしたと声をかけた。

国井と林は師匠の風邪が長びいていると聞いて見舞いにあらわれたのだが、見舞いが済んだあとで稽古着と竹刀を借りて、子供たちに稽古をつけてくれたのである。国井に逃げられて、まさか跡を追うわけにもいくまいと観念したか、林伝五郎は慎蔵が身支度するのを待ち、戸締りを手伝って一緒に外に出た。

「いまは貴公が実力一番だそうだな」

と林は言った。林とか国井とか、あるいは普請組にいる清野徳平とか、むかし桂木道場で鳴らした人人はいまはそれぞれに家を継いで勤めを持ち、そうなってから年月もたつてめったに道場にくることはなくなったが、それでも道場に対する関心はうすれずにつづいているらしかった。

その証拠に、今日のように突然に現われて後輩に稽古をつけたりする。

「いや、それは違います」

と慎蔵は言った。

「師範代の小川さんがおられますし、それに次席の浅井文之進がいてそれがしなど齒が立ちません」

「小川甚九郎か」

林は親しみをこめた口調で言った。三十になる小川は、林やさつき逃げた国井たちに鍛えられた文字どおりの後輩である。時どきそのころの激烈な稽古の話を慎蔵らに聞かせることがある。

「しかし甚九郎はこの春ようやく谷村に婿入りして、夏からせっせと会所に出仕しておる。師範代の役目は果しておるまい。それに……」

林はじろりと慎蔵を見た。

「浅井よりは貴公の方が腕は上だという評判がもっぱらだぞ」

「ただのうわさに過ぎません。事実と異なります」

ふーんと林は言った。

「貴公につづくのは誰だ。葛西か、船村か」

林も、さっきの失言から逃げを打っているのだ、と慎蔵は思った。いま歩いているひと気のない裏小路を抜けると、いきなり城下でもっともにぎやかな商人町の通りになる。そこに出現しまえば、いま腹の中にある質問を持ち出すことはむづかしい。

林はそう読んで、時間つなぎの無駄話をしているのだ。その思惑につき合って、思い

がけなくころげこんできた機会を潰すことはない、と慎蔵は思った。

「失礼ですが、さきほどお二人で話されていた三人目の討手というのは、どなたのことでしょうか」

林は立ちどまると、しぶい顔をして慎蔵を見た。

「やはり聞いておったか」

「はあ、たまたま耳に入りましたもので」

「ほんとうは知らん方がいいのだ。その方が貴公のためでもある」

と林は言った。しかしすぐに思い直したようにつつけた。

「しかしそうは言っても、耳に入ってしまったものを話さんというわけにもいくまい」

「ぜひ、おねがいます」

慎蔵はふたたび胸の動悸が高まるのを感じた。叔父の権之丞を信州まで追尾して討ちとめたのは二人、野田道場に籍をおく剣士樋口宗助と穂刈欣之助だと言われている。

樋口と穂刈はその後それぞれに一人は家督をつぎ、一人は家中に婿入りして城に出仕していると聞いてはいたが、慎蔵は快くはないものの二人に怨みがましい気持を抱いたことはない。お役目だから仕方なかったと思っていた。だが今日突然に林と国井の話に